朝日新聞
発行所
朝日新聞東京本社
東京都千代田区有楽町二丁目三番地
電話 東京（212）0131
郵便振替口座 東京1730番
© 朝日新聞東京本社1968

ユエに潜んで八日間

日本人書記官の手記

【サイゴン＝奥尾特派員十二日発】 サイゴンの日本大使館の金子書記官は、ユエを市街中に南ベトナム民族解放戦線（ベトコン）の旧暦攻勢に会い、ユエ大学構内の図書館倉庫に閉じ込められ、十日ぶりに米海兵隊に救出された。ユエ大学本部構内は完全に解放戦線に占領されていたが、金子書記官はサイゴンから脱出に来た文学部講師ということで押し通し、ついに無傷で救出された。激しい戦闘で金子書記官のいた倉庫もほとんど破壊され、同書記官は死を覚悟し、死後の記録に、という気持で、ノートに緊張きわまる日記をつけていた。以下はその日記からの抜すいである。

（ベトナム関係記事、3・14面に）

金子書記官

一月三十日　夕方友人のユエ大学教授宅を訪問すると「今夜あたり解放戦線の襲撃があるらしいから、出張かゆうべ」と注意を受ける。午後十二時ごろ就寝。

三十一日　午前四時、パチパチという激しい銃声に目をさます。窓の外に照明弾が落ち、米군らしいヘリコプターが飛び回る。銃声がだんだん近づくので機関銃を感じ、ベッドから降り、部屋のすみに身を伏せる。六時半、四発発射する。戸外に人の声がするのでのぞくわのすくと、背のうを背負った二人の兵士の姿が目にはいった。解放戦線に違いない。夜明けとともに、上空にジェット機やヘリコプターが絶えず飛来。まるで海のような機銃掃射。宿舎のまわりからは二発ずつ撃ちあがって機関銃や小銃が撃ちあげられる。大学本部の建物に四、五十人の解放戦線の兵士の姿がはっきり見えた。二階の文学部長の部屋をノックする。解放戦線に違いない。夜明けとともに、上空にジェット機やヘリコプターが絶えず飛来。まるで海のような機銃掃射。宿舎のまわりからは二発ずつ撃ちあがって機関銃や小銃が撃ちあげられる。大学本部の建物に四、五十人の解放戦線の兵士の姿がはっきり見えた。二階内につめかけている。管理人のおばあさんがおそれる。ひとつわのすくと、背のうを背負った二人の兵士の姿が目にはいった。

ノートに日の丸書く

二月一日　午前一時半目をさます。依然としてものすごい撃ちあい。明け方、ドアがガタガタ音をたてた。心臓が一瞬止った。極度がドアをゆすっただけだった。ノートを破ったたどたどしいベトナム語で「自分は日本人だ」と書き、日の丸をえがいた。解放戦線が来たらこれを見せよう。

正午近く、スピーカーを通じて大音が響いてきた。よくわからないが明らかに民衆に呼びかける解放戦線の放送とおもう。

落着いた北正規軍

二日　七時半ごろ、激しい砲声と悲鳴にめざめる。戦闘員が大勢構内につめかけている。管理人のおばあさんがおそれる。ひとつ

一月三十日　夕方友人のユエ大学教授宅を訪問すると「今夜あたり解放戦線の襲撃があるらしいから、出張かゆうべ」と注意を受ける。午後十二時ごろ就寝。

三十一日　午前四時、パチパチという激しい銃声に目をさます。窓の外に照明弾が落ち、米군らしいヘリコプターが飛び回る。銃声がだんだん近づくので機関銃を感じ、ベッドから降り、部屋のすみに身を伏せる。六時半、四発発射する。戸外に人の声がするのでのぞくわのすくと、背のうを背負った二人の兵士の姿が目にはいった。解放戦線に違いない。夜明けとともに、上空にジェット機やヘリコプターが絶えず飛来。まるで海のような機銃掃射。宿舎のまわりからは二発ずつ撃ちあがって機関銃や小銃が撃ちあげられる。大学本部の建物に四、五十人の解放戦線の兵士の姿がはっきり見えた。二階内につめかけている。管理人のおばあさんがおそれる。ひとつ

滝のような銃撃

踏込んできた解放戦線

ドイツ人連行を見ておののく

（金子書記官の手記は2面に）

【サイゴン十二日発＝AP】南ベトナム政府軍機は十二日、古都ユエの王城跡にたてこもっている北ベトナム、解放戦線軍を爆撃した。

北ベトナム軍と民族解放戦線軍は占拠中の王城跡南東地区から五十メートル対空砲を発射して応戦した。

かつてグエン王朝の帝が代々住んでいた面積ある王城跡はいまやガレキとなり、内部には依然、解放戦線軍一個連隊の残存部隊がたてこもっている。解放戦線軍ははじめ約二千人といわれ、その後かなりの損害を受けたが、また増強されているものとみられる。米軍と南ベトナム政府軍の力は間もなかにされていない。一方、米海兵隊はユエ南部から撤退を続け、南部地区では市の機能はマヒしているものの治安はかなり回復してきた。だが、戦闘が激しかった御路にはまだ多数の死体が散乱している。

（注）ユエ王城跡　一八〇二年にジャロン帝がベトナム歴史ではじめてベトナムを統一してグエン王朝を建てて以来、同王朝九代の王城であった。北京の紫禁城を模して、香河の北岸に周囲五キロの堀をめぐらせ西半の内城、東半の外城に分れている。現在、外城はユエ市の商業地区となっているが、内城は南ベトナムでほとんど唯一の文化財として保存され、歴代の王が即位式を行なった太和殿、王宮の住居、各王の墓や宝物を祭る宗廟（びょう）などがある。ハノイ（旧トンキン）サイゴン（旧コーチシナ）の両勢力にはさまれた中部ベトナム（旧安南）のひとびとにとっては、この王城跡はユエが全ベトナムの王城の地であったことを今に残す精神的な象徴であり、これが破壊された意味は大きい。

四日　突然、管理人を先頭に解放戦線の兵士五、六人がはいってきた。みんな若く、十二、三歳くらいの少年もいる。緊張で彼らの面もひきつっているようだ。肩から腰にかけて弾帯を巻きつけ、ものものしい感じ。部屋をひとわたり点検したあと、管理人にきかんに問いかけている。ふるえをおさえながら、たまって立つ。パスポートを出して日本人であることを名乗ろうかとも思う。自分の顔を不審そうにながめまわしただけで、出ていった。へなへなとすわり込みたい気持だった。窓の外をのぞくと北ベトナム軍がいた。彼らはようやくら、民衆との接触は解放戦線にまかせて、もっぱら戦闘に専念している様子だ。

午後、向いの建物から四人の外国人が解放戦線に連行されるのを見た。女性が一人いた。あとでわかったのだが、彼らはユエ大学医学部教授でドイツ人だった。外人

6日、ユエの市街戦で負傷した解放戦線兵士を捕虜にする米海兵隊員（UPIサン）

ラジオを持っているものを見つけ、BBC放送やNHK海外放送を聞き、はじめて全国的な解放戦線の攻勢を知る。ベッドの下で外に聞えないように息を殺して、聞いた。米海兵隊がユエに発して解放戦線と市街戦を展開しているニュースもわかった。自分は解放戦線陣地の中にいるのだ。

いってきて、ジロジロ観察して、出ていった。いったい自分はどういう現由におかれているのか。（あとになって管理人が「サイゴンから来た文学部講師」と答えていてくれたことがわかる）。たまりかねて文学部長の部屋をもう一度ノックしたら、そっと細めにドアがあいて、われわれは一週間

だけ特別保護するのだろうか。それなら自分もたのもうか、いやまて、はやまるな。これもあとで知った。ジョンソン大使が、ベトコンの甘い声が聞えて来た。なつかしさにうろめしき、それは日本とベトナムのあまりにも大きい何ともいえない親和感が胸をついた。

胸つく戦争の悲惨

七日　九時、居眠りからさめ

ようとして戦争した。われも部屋から一歩も外へ出ず、ひそんでいるのだ。

一時いてはあぶないという気がして三階に移ろうと考えたが、三階はロケット砲弾をうけていて、窓の涙して壁が二重になっている所を見つけ、机、テーブルなどありゆるものを積み重ねて、ベッドを入れ、流れ弾が当ってもかしは安全になろう。NHK海外放送を聞いたらマニュエスタースの甘い声が聞えて来た。なつかしさにうろめしき、それは日本とベトナムのあまりにも大きい何ともいえない親和感が胸をついた。

金員出れという合図をしている。八日ぶりに地面を踏んだ夕方五時、米軍司令部にむかって歩く。町の姿はうつろに、わが目を疑った。中心部のレロイ通りは完全にがれきの山と化していた。神島太郎の気持だ。川向の王宮の壁の上に解放戦線の旗がひらめいている。川ぶちのユエ大学教育学部構内は難民収容所になっていた。二日を越すほどの人々が取巻き見ぬつけぬ混雑だ。戦争の悲しさが胸を刺した。

（金子書記官はこれから三日のち、米軍機で無事サイゴンに帰った。）

いが構内にきて、小走りにかけている。ときどき解放戦線のそ警兵が駆ってくる。

（金子書記官の手記は2面に）

日本の放送に違和感

六日　一週間目。間ひろうつ左左。前後一晩中宿舎の回りを人の群れが走り回る気配だった。いよいよ最後の決戦が近づいたのだ。

一時いてはあぶないという気がして三階に移ろうと考えたが、三階はロケット砲弾をうけていて、窓の涙して壁が二重になっている所を見つけ、机、テーブルなどありゆるものを積み重ねて、ベッドを入れ、流れ弾が当ってもかしは安全になろう。NHK海外放送を聞いたらマニュエスタースの甘い声が聞えて来た。なつかしさにうろめしき、それは日本とベトナムのあまりにも大きい何ともいえない親和感が胸をついた。

金員出れという合図をしている。八日ぶりに地面を踏んだ夕方五時、米軍司令部にむかって歩く。町の姿はうつろに、わが目を疑った。中心部のレロイ通りは完全にがれきの山と化していた。神島太郎の気持だ。川向の王宮の壁の上に解放戦線の旗がひらめいている。川ぶちのユエ大学教育学部構内は難民収容所になっていた。二日を越すほどの人々が取巻き見ぬつけぬ混雑だ。戦争の悲しさが胸を刺した。

（金子書記官はこれから三日のち、米軍機で無事サイゴンに帰った。）

また解放戦線兵一人が部屋には

ぶりに背負した。われも部屋から一歩も外へ出ず、ひそんでいるのだ。

一時いてはあぶないという気がして三階に移ろうと考えたが、三階はロケット砲弾をうけていて、窓の涙して壁が二重になっている所を見つけ、机、テーブルなどありゆるものを積み重ねて、ベッドを入れ、流れ弾が当ってもかしは安全になろう。NHK海外放送を聞いたらマニュエスタースの甘い声が聞えて来た。なつかしさにうろめしき、それは日本とベトナムのあまりにも大きい何ともいえない親和感が胸をついた。

金員出れという合図をしている。八日ぶりに地面を踏んだ夕方五時、米軍司令部にむかって歩く。町の姿はうつろに、わが目を疑った。中心部のレロイ通りは完全にがれきの山と化していた。神島太郎の気持だ。川向の王宮の壁の上に解放戦線の旗がひらめいている。川ぶちのユエ大学教育学部構内は難民収容所になっていた。二日を越すほどの人々が取巻き見ぬつけぬ混雑だ。戦争の悲しさが胸を刺した。

（金子書記官はこれから三日のち、米軍機で無事サイゴンに帰った。）